

# 中日ニューズ

シネスコ版

No. 595

40. 6. 11

## 第二報

### 一、山野鉦ガス爆発

—福岡—

一日午後零時四十分頃突然起つた九州山野鉦のガス爆発は一瞬にして二百三十七人の生命を地底に葬つた。

今年になってすでに北海道夕張炭鉦、長崎伊王島炭鉦に続き、山野炭鉦は三井、三池の死者四五八人に次ぐ戦後二番目に大きな事故となつた。

そして不幸な災害遺族を又も作ってしまったのです。

事故の起る度に保安体制が問題にされるにもかかわらず、事故は後をたつ事が無い、今度の山野鉦は「組夫」という新たな問題を投げかけた。

その組夫こそは、現在の苦境に立つ石炭産業を支える合理化の花形である。

保安体制をかえり見ない生産第一主義、今回もその例外ではなかつた。

三井時代の赤字会社が、第二会社として再起するや、一きよに黒字に転じた秘けつもある。

出炭量は一人当り日に、三井時代の三倍四十四トンもある。そして安い賃金、出来高制、請負いという機構につきまとう危険な仕事、掘進、仕繰り、撤収等々であつた。

全滅という組も数少なくない。日に十いくつも葬式にかけ廻る組頭。

頭を失つた組は、組頭の子供がその任に当る。爆発の悪夢もさめやらぬ鉦夫達は坑道に入ろうとしなかつた。組頭は必死になつて人を集めるに誰も集まらぬ。

数日後、働かねば生きて行かれぬこの人達は、少数ではあるが集まり、再び地下にもぐつた。

従業員千四百数人を抱える中けん企業が自動警報機を一台も設置してなかつたという事実、それでも山野鉦は筑豊でも良い方だという。

一体、残された多くの炭鉦の現状とはどの様なものだろうか。

入れ代り、たち代り現地を視察した議員達は、炭鉦に何を見たのだろうか、一日も早く事故の究明とその対策がこうせられねばならないのです。